

第 36 回 UJNR 水産増養殖専門部会事務会議

議事録

第 36 回 UJNR 水産増養殖部会は 10 月 29 日より 11 月 2 日にかけて、ニューハンプシャー大学、ケープコッド(マサチチューセッツ州)およびミルフォード(コネチカット州)で開催された。事務会議とシンポジウムはニューハンプシャー大学のニューイングランドセンターにおいて 10 月 29 日から 30 日にかけて、またミニシンポジウムは米国海洋大気局(NOAA)北東水産研究センターのミルフォード研究室において 11 月 2 日に実施された。シンポジウムのテーマは「無脊椎動物の養殖技術」であった。

開会の辞

開会を宣言した後、米国側部会長のロバート・イワモト博士が、日本側部会の代表各位と部会長の中野広博士に対し歓迎の意を表した。イワモト博士は米国側部会を代表し、今回の会に参加するためのここに至る長旅の労をねぎらった。彼はまた UJNR 水産増養殖部会の重要性を強調し、また過去 36 年間における日米間の協力と連携が米国側にとって非常に利の多いものであったことを述べた。彼はまたこれらの UJNR 水産増養殖専門部会を通じた科学技術交流の成功は、両国の、特に若手研究者にとっての技術と文化交流の架け橋となっていると述べた。

中野博士は本年度のテーマに対する興味について述べ、また UJNR 水産増養殖専門部会は UJNR の各部会の中でも非常に重要で活発なものであると述べた。中野博士は日本側部会を代表し、米国側代表団の本会議の開催の労に対する謝意を示した。そして最後に、本会議が実り多きものになることを期待する旨の意を表した。

参加者の紹介と議事確認

部会員と参加者の自己紹介が行われた。イワモト博士は議事日程の了承を求め、全員がそれに同意した。

科学交流と文献交換

日本側部会の事務局長補佐である生田和正博士が、前回の UJNR 会議以降日本人 6 人が共同研究のために米国に赴いたと報告した。米国側部会副会長のマイケル・ラスト博士は、同間に 3 件の新たな共同研究を含めて、計 9 件が実施されている旨の報告を行った。研究交流で実施されている課題には、バイオテクノロジー、沖合養殖、アワビ類の生活史、生理学や遺伝学が含まれる。生田博士はまた 4 件の様々なシンポジウム、会議あるいはワークショップに参加するため、18 名の科学者が米国に赴いたことを指摘した。これには資源増殖、サケ類資源管理、および魚類健康に関

する会合が含まれている。

生田博士から、今現在日本側からの文献出版は 123 件であることが報告された。ラスト博士からは米国側は 45 件であると報告した。米国側の文献は NOAA 図書館のエイリーンマクベイ氏により準備され、三重県の生田博士の元に送付された。

その他とし、UJNR 関連事項の将来的な科学交流あるいは事務的な事項として 6 件の追加的事項が生田博士より報告があった。これらには生田博士および他の日本人科学者が米国と米国の支援により開始した韓国およびハワイの沖合養殖施設の視察が含まれる。ラスト博士は彼の報告に謝意を表した。

プロシーディング集の進捗状況

イワモト博士から第 34 回 UJNR 会議のプロシーディング集はすでに出版済みであり、見本が各部会員の書類閉じの中に入っていると報告があった。また 150 部が既に三重県の生田博士の元に発送済みである。それらのプロシーディングスは UJNR ホームページあるいは北西水産研究センターのホームページから PDF 形式書類としてダウンロードすることが可能である。

生田博士は第 35 回 UJNR シンポジウムのプロシーディング集の原稿は、水産総合研究センター研究報告に特別号として出版される前に編集作業のためラスト博士に送られる旨を述べた。生田博士は次回の UJNR 会議の前に出版するため早急に作業することを述べた。ラスト博士はその重要性に同意した。ラスト博士と部会員であるロバート・スティックニー博士が原稿の到着次第編集に着手する予定である。

前回からの懸案事項

ラスト博士は文献交換の変更を以下のように提案した。第 35 回 UJNR 年次合同会議において、ひとつの UJNR の役割として実施されている文献交換の見直しを提案した。米国側は日本側の検討のためその年案文を準備した。

昨今コンピューターを利用した検索能力が向上しており、増養殖の幅広い課題の中から選択された文献を綿密に調べてゆく必要が少なくなっている。しかし日本で書かれている文献の多くは日本語で書かれたものであり、米国研究者にとって検索の際の困難性がある。米国側は、日本側からの文献交換作業の可能性のある変更のいかなる別案も含めていくつかの案の検討を求める。

提示された案は以下の通りである。

- 1) 交換を変更のないまま継続する。
- 2) 代替案を考えずに文献交換は廃止する。
- 3) 文献交換を科学シンポジウムの話題に焦点を当て、通常は
 - a. それぞれの論文の主要な成果の要約を付ける(注釈としての文献交換)。

- b. 論文の主要な成果の要約は付けない。
- 4) 文献交換を科学シンポジウム of 話題に焦点を当て、それぞれの発表にその人の研究分野とその人の発表する話題に関連する3-5行程度の要約のついた文献リストの提供を依頼する。
 - 5) その他の提示可能な案。

生田博士は、日本側部会は無理のない文献交換の改善として第4案が最も効果的な案と考えたと応じた。日本はまた県水産試験場の出す年次技術報告の内容リストを供給する。日本側部会はまたASFA(海洋科学水産要覧)の更なる活用を求め、結論とした。この新たな策は第37回会議から実施されるものとする。詳細なる形式と講演者への指示は第36回会議終了後、第37回会議までに事務局により準備が完了されるものと期待される。発表者は可能であれば文献交換のための別刷りも供給されたい。

イワモト博士はUJNRの成果の歴史を編纂するための作業グループの構成のための提案を第35回UJNR年次部会で始めて行った。米国側部会は両会議の間に日本側の検討用の提案書を準備した。

米国側の提案は両国の2-3人からなる長期にわたる関係者、あるいは名誉会員が過去35年以上にわたるUJNRによって成し遂げられた成果に焦点を当てた文献を作成するための小作業部会の立ち上げを求めるものであった。この文献はUJNRに興味を持つ人々のために、ひとつの歴史的背景を示すものとして利用され、さらに重要な点としてはひとつの確固たるUJNR水産増養殖専門部会の価値をそれぞれの所属機関に文章として示すために利用されるものである。

本作業部会の詳細な目的は以下のものである。

- 1) 文章、図、表、写真を用いてUJNRの歴史を簡潔に表す。
- 2) 可能な限り範囲を広げて共同研究、科学交流、学生交流、会議、文献交換によりなされたこの発展事項を詳細に記載する。
- 3) 第37回UJNR部会においてこれらの成果について発表を行う。
- 4) UJNRによって第37回会議に間に合うようにNOAAのテクニカルメモやUJNR部会に発送可能な他の様式で出版に適した成文の文章を作成する。

もし日本側が了解するならば米国側は次の人を作業部会員として推薦する。すなわち、コンラッド・マンケン博士(名誉部会員、元米国部会長)、ジェームス・マクベイ博士(名誉部会員、元米国部会長)、チャールズ・ヘルズレイ博士(名誉部会員)である。

生田博士は日本側として作業部会の米国側の提案に同意する旨返答した。日本側部会は日本側作業部会として松里寿彦博士(名誉部会員、元日本部会長)、藤谷

超博士(名誉部会員, 元日本部会長), 福所邦彦博士(名誉部会員)を推薦した。日本側部会運営委員会は, 本作業は日米両国にとって UJNR 活動の成果を世に示し, 未来に向けて水産増養殖の研究開発の方向性を示すために非常に重要なものであるとの意を提示した。これらのことから UJNR 事務局は本作業を強く支持するものである。日本側部会は米国作業部会員がそれに関する報告を立案しその草案に日本側の作業部会員からの情報を付け加えることを求めると提案した。

イワモト博士は生田博士の提案に同意を示し, さらに本作業は一年以内に完了させるのは非常な困難を伴うものになるかもしれないが完遂の努力は是非とも必要であると述べた。

新たな事務案件

生田博士は過去のシンポジウム参加者の一人から, 彼が UJNR に出席して以来米国からのスパムメールが非常に増加したとの苦情を受けた旨報告した。彼は, これは UJNR ホームページに掲示された講演要旨にある電子メールアドレスがいくつかのスパム会社に調べ取られたためであろうと考えている。水産総合研究センターはこの種の問題を避けるために JAVA スクリプトを用いてホームページを管理している。しかしながらプロシーディングスおよび講演要旨は PDF ファイル形式で貼付されている。生田博士は全ての電子メールアドレスの @ の文字を別の文字に書き換えるのが最も簡単な解決策であるとの提案を行った。この対応策は第 36 回会議後, われわれが要旨をホームページ上の他の資料に貼り付けるときから適用されるものである。

ラスト博士は本会議の要旨から全ての電子メールアドレスの @ のシンボルの代わりに代替文字の at の前後にスペースを入れ, スパムを用いる集団によって使われる自動収集技術から守ることを試みると報告した。本趣旨は読者と電子メールアドレスに対する合法的要求に明確になるよう出版物の前扉のページに示されることとなる。

生田博士は講演パワーポイントがホームページ上に掲載されるものかの質問を行った。多少の議論の後, 発表者が要求した時にのみホームページ上で公開されることで同意された。

生田博士は世界水産会議の開催に関連し, 日本で水産総合研究センターによる二つの国際シンポジウムが開催される予定である旨アナウンスを行った。ひとつはアサリ資源増殖と管理の国際シンポジウムであり, もう一件はマグロ増養殖の現状と将来発展に関する国際シンポジウムである。両者共に横浜で世界水産会議の直後 2008 年 10 月 25-26 日に開催される。生田博士は UJNR 科学シンポジウムで配布できるように会の案内の配布物を持参した。ラスト博士は実務会議日程と科学シンポジウム書類に情報を添付することを報告した。

ラスト博士は養殖魚の飼料の未来に取り組むための NOAA による第一段階の取り組みに対する報告を行った。魚類飼料の未来を示してゆくための国際的な専門家の

作業部会を提案した。その概要は、1月に専門家による作業部会会議を持ち、2008年の春の終わりごろまでに研究成果の公的報告を伴った文書作成を行うことである。目的としては、魚類飼料を取り巻く誤解の正しい方向への修正と将来的な研究開発の方向決めにある。生田博士は、日本側部会はこの取り組みに非常な興味があると応じ、作業部会に入れるため二名の科学者を提供することで両者は同意した。ラスト博士は日本側部会の事務局員である吉松隆夫博士に情報と詳細について提供を行うこととした。

第37回 UJNR 会議開催案

生田博士は日本側部会が第37回 UJNR 会議を横浜で2008年の24-25日に開催される世界水産会議、そして先に述べた25-26日に持たれる二件のサテライトシンポジウムと共に開催する予定である旨案内した。第37回 UJNR 会議は10月27-11月1日に横浜近辺で開催される予定である。また茨城県の水産工学研究所にフィールドトリップを予定している。イワモト博士は日本側部会に対し、そのような興味深い計画を考えてくれたことに謝意を表し、来年の会議を楽しみにしていることを述べた。

第36回 UJNR 科学シンポジウムの予定

シンポジウムの企画担当であるリチャード・ランガン博士は科学シンポジウムの詳細と日程について報告した。

ラスト博士はフィールドとリップの旅の説明を行った。

謝辞

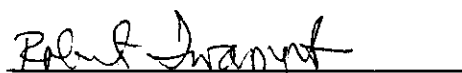
イワモト博士はこの会議への参加と協力について部会員と参加者に謝意を表した。彼はまた通訳者に対し協力の謝意を表した。中野博士はまた全ての出席者に謝意を付け加えた。

閉会

すべての協議が無事終了し、第36回 UJNR 実務会議は閉会した。これらについての議事録は2007年11月2日にコネチカット州ミルフォードにおいて署名された。



日本側部会長 中野 広



米国側部会長 ロバート・イワモト